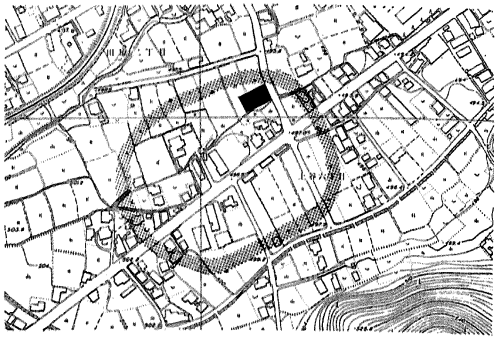
2　三ノ側遺跡

都留市上谷字三ノ側

立　　地

遺跡は桂川の右岸段丘上に位置し、この遺跡が所在する上谷・田原地区周辺は段丘の幅も広く、平坦地が拡がっている。



第１図　遺跡の位置

調　　査

調査は岡島ファミリコ都留タウン建設に伴う調査として、昭和56年３月20日～同年５月26日まで実施した。

調査によって、歴史時代の住居址５軒が検出され、また、遺物では国内最古の鋳造貨幣である和銅開珎や皇朝十二銭のひとつである富寿神宝などの銭貨や、紡錘車・鎌・刀子などの鉄製品などが発見された。

層　　序

三ノ側遺跡では、標準土層は５層に分けられた。

第Ⅰ層　表土（耕作土）

第Ⅱ層　茶褐色土。赤色・黄色粒子を若干含有し、粘性は強い。

第Ⅲ層　黒色土。赤色・黄色粒子を若干含有し、粘性やや強い。

第Ⅳ層　黄褐色土。赤色スコリアを多量に含有し、粘性は弱い。

第２図　遺跡の近景

第Ⅴ層　黒褐色土。粘性弱く、0.5～１㎜程度のスコリアを多量に含有する。

第Ⅵ層　熔岩。猿橋熔岩と思われる。

遺　　構

調査によって、奈良・平安時代の住居址が５軒検出された。

これらは、出土遺物より第１・３・５号住居址は８世紀前葉期に、また、６・７号住居址は９世紀中葉～後葉期に、それぞれ比定されるものと思われる。

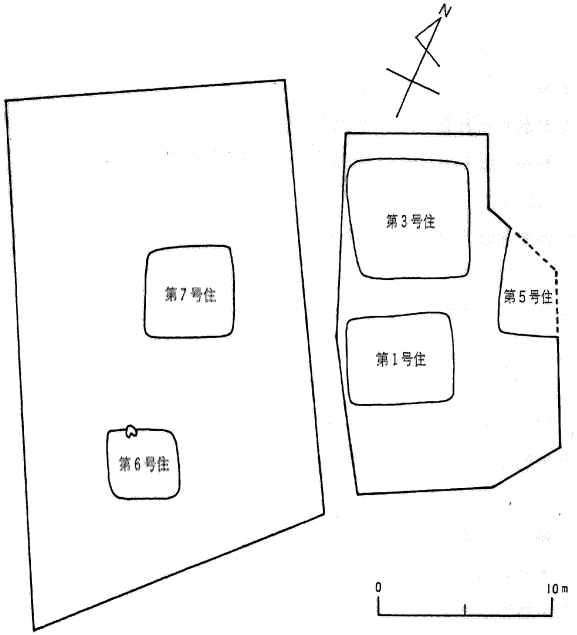
第１号住居址

本住居址は、5.80m×4.65mの方形プランを呈し、壁高は50㎝を測る。

床面は平坦であり、南壁および東壁の一部を除いて周溝が壁際を巡る。

かまどは、粘土を主体としたものであった。

出土遺物としては、覆土上面より和銅開珎・富寿神宝などの貨幣が発見され、また、覆土や床面から８世紀前葉、および、９世紀中頃の土師器・須恵器が出土した。



第３図　遺構全体図

第３号住居址

本住居址は、6.80m×6.60mの方形プランを呈し、壁高は南壁で37㎝北壁で55㎝を測る。

床面は平坦であり、かまどの周辺から、南壁を除く、各壁際には周溝が巡つていた。

出土遺物としては、８世紀前葉の土師器・須恵器が出土した。

第４図　第１号住居址

第５号住居址

本住居址は全貌を明らかにすることはできなかったが、一辺5.5mの方形プランを呈するもので、壁高は25㎝を測る。床面は平坦であり、壁際に周溝が巡る。

出土遺物としては、８世紀前葉の土師器・須恵器が出土した。

第６号住居址

本住居址は、3.75m×3.50mの方形プランを呈し、壁は垂直に立ち上がり、壁高は20㎝を測る。かまどは北壁に、熔岩礫を芯材にその周りを粘土で覆って作られている。

出土遺物としては、９世紀中頃の土師器・須恵器が認められた。

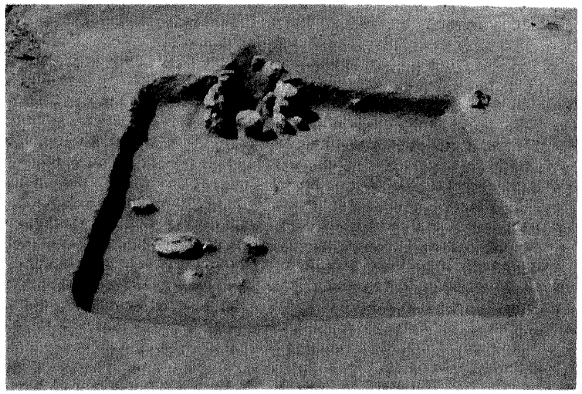
第７号住居址

本住居址は、5.08m×4.76mの方形プランを呈し、南側に張り出しが認められる。床面は平坦であったが、張り出し部は一段高くなっている。

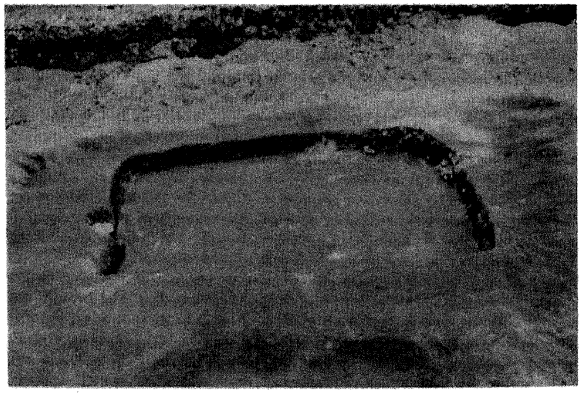
かまどは、保存状態が良好なもので、溶岩礫を芯材にまわりを粘土によって構築されたものであった。かまど内から、鎌と刀子などの鉄製品が出土した。

出土遺物としては、９世紀中頃の土師器・須恵器が認められた。

第５図　第３号住居址



第６図　第６号住居址



第７図　第７号住居址

遺　　物

本遺跡出土の土師器の皿形土器・坏形土器・甕形土器の分類を行うと次のようになる。

皿形土器

Ａ類―非ロクロ整形（註１）で、口縁部が外反しないものである。

Ｂ類―ロクロ整形のもので、口縁部は外反し、玉縁状になるものが多く、底部外面には糸切り痕（註２）を残すものが認められ、体下部外面にヘラケズリ（註３）や回転ヘラケズリが施されたものである。

坏形土器

Ａ１類―非ロクロ整形で、体下部にヘラケズリが施された「堀之内原 type」（註４）の坏で、紫褐色を呈するものである。

Ａ２類―Ａ１類に類似する形態のもの。

Ｃ１類―ロクロ整形で、平底、盤状を呈するものである。

Ｃ２類―ロクロ整形で、形態的にはＤ類に近いが、ミガキを伴わないものである。

Ｄ１類―ロクロ整形で、口縁が外反せずに口径に対する底径比が大きいもので、内外面にミガキ・暗文が多用された大型の坏である。

Ｄ２類―Ｄ１類と同様の調整・器形の坏である。

Ｅ１類―ロクロ整形で、体外面下半に横・斜めヘラケズリが施され、低平で口縁部が外反するものである。

Ｅ２ａ類―ロクロ整形で、体外面下半に斜めヘラケズリが施され、器形は逆台形で口縁部が外反する。一部に糸切り痕を残すものや全面ヘラケズリが施されたものも認められる。

Ｅ２ｂ類―Ｅ２ａ類と同様の器形・調整で、内面が黒色処理されたものである。この場合、体外面に放射暗文や、底内面にラセン状暗文が施されたものが認められる。

Ｅ３ａ類―ロクロ整形で、体外面下半に斜めヘラケズリが施され、口径は大きく底径は小さい。底外面全面を一定方向にヘラケズリされたものが多い。

Ｅ３ｂ類―Ｅ３ａ類と同様の器形・調整で、内面が黒色処理されたものである。この場合、体内面に４単位の集合放射状暗文や縦位のラセン状暗文が施されたものが認められる。

上記のＥ１～Ｅ３類には、体内面に放射状暗文が施されたものが多い。

Ｆ１類―内面が黒色処理され、やや内湾気味のものである。体内面全面にミガキが加えられたものである。ロクロ整形かどうかは不明である。

Ｆ２類―ロクロ整形で、内面が黒色処理され、体内面に縦・横のミガキが施されたものである。

Ｆ３類―ロクロ整形で、体外面下部に横・斜めヘラケズリが施されたもので、底径に対する口径比が大きい。

甕形土器

Ａ類―「堀之内原 type」の甕、および「堀之内原 type」の甕と同じ胎土の甕である。

Ｂ類―最大径が口縁にあり、口縁部の断面が長方形状を呈するもので、基本的に体外面は斜めハケ・体内面は横ハケ調整のものである。

Ｂ１類―口縁部の外方への突出が短く、体外面縦ハケ、最上部に丁寧な横ナデ、口縁内面に横ハケが施されている。

Ｂ２類―胴下部のすぼまりが急なものである。

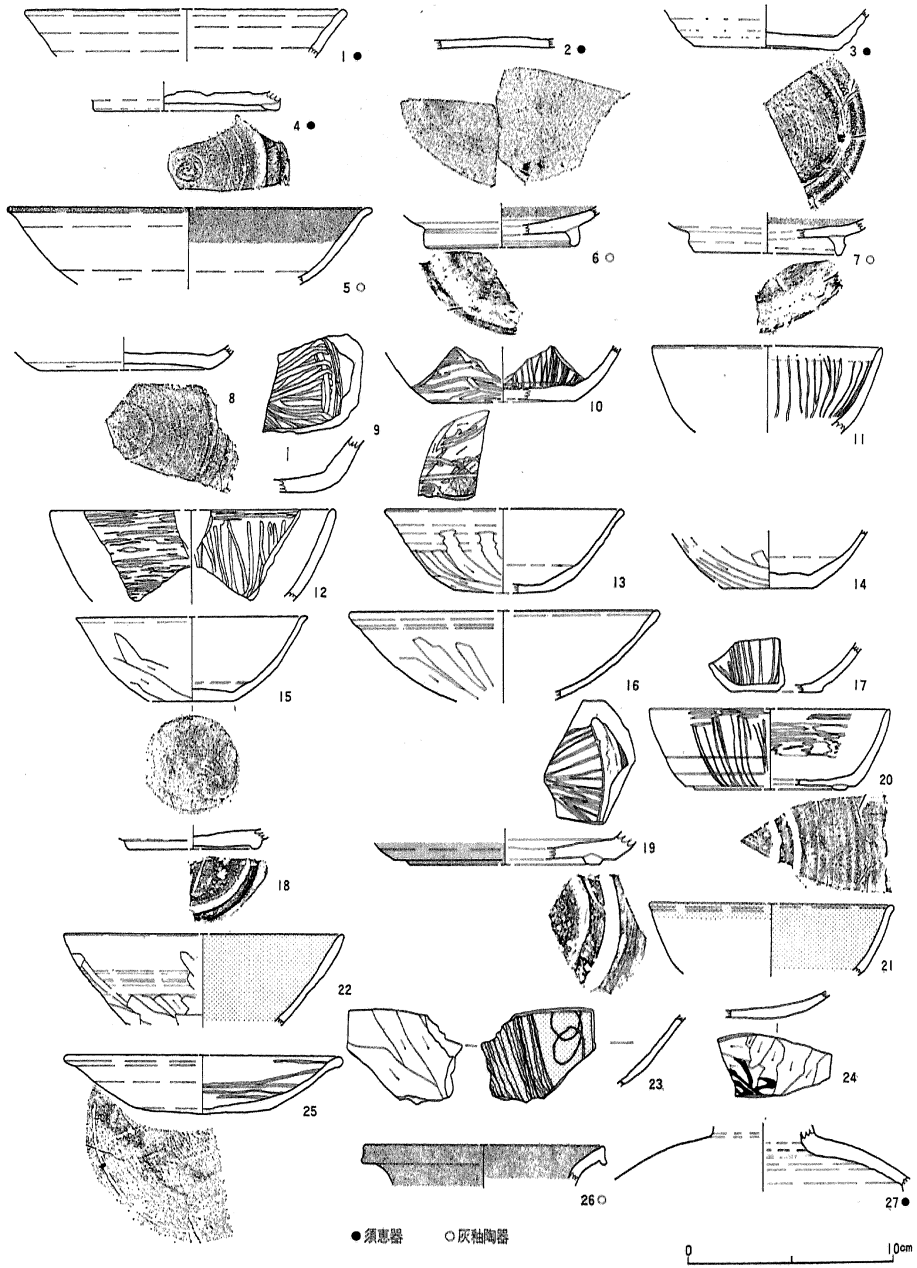
Ｂ３類―口縁の外方への突出が長いものである。

Ｂ４類―中型の製品である。

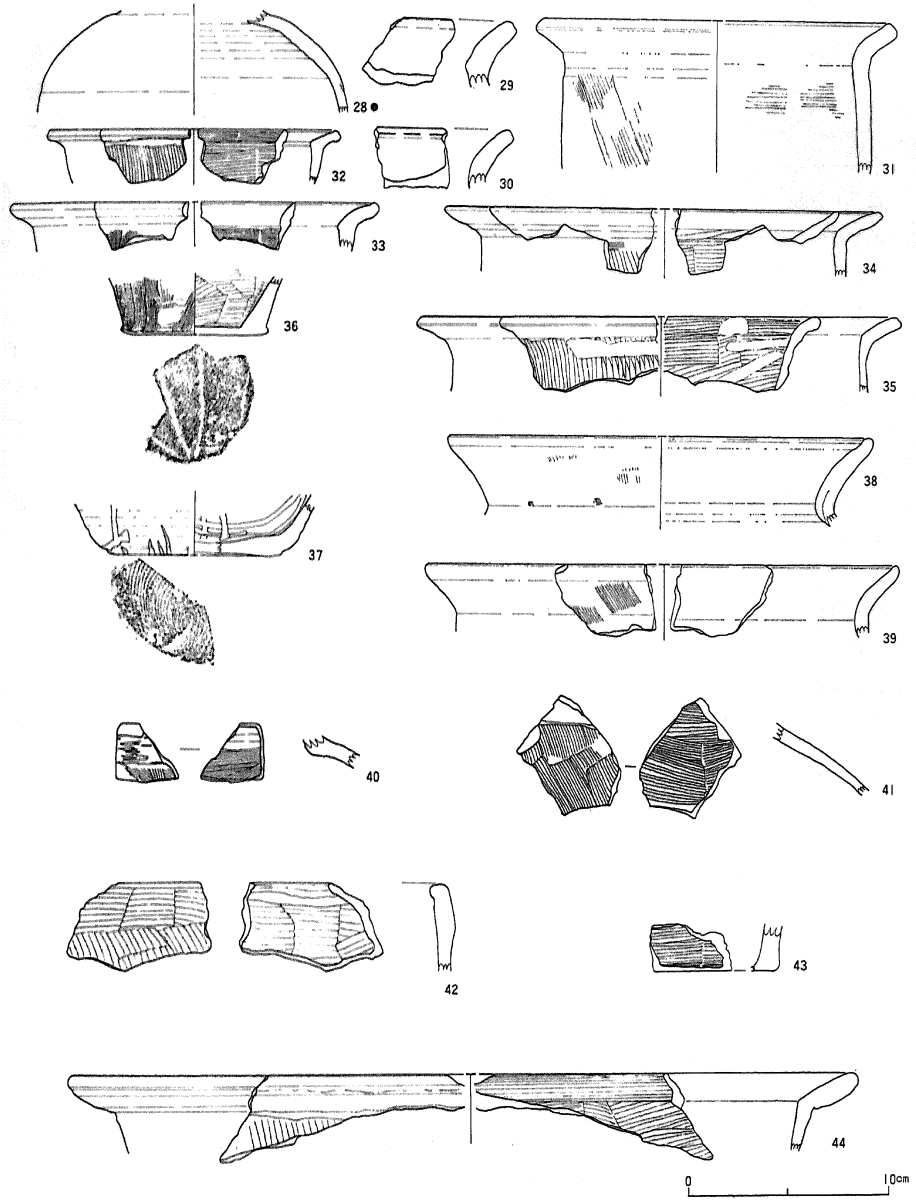
Ｂ５類―大型の製品である。

Ｃ類―口唇部が面を成さず、体外面斜めハケ、体内面横ハケが施されたものである。

Ｄ１類―「駿東型」の胴張り甕で、口唇部内外・口縁部最下部内面が肥厚するものが認められる。外面には細かい斜めハケやミガキが、内面には横ハケが施され、２種以上の工具を使う場合も多い。口縁部内面に松葉状（鋸歯状）のミガキが施されるものも認められる。赤褐色を呈す



第8図　第1号住居址出土遺物(1)



第9図　第1号住居址出土遺物(2)

る。

D２類―口縁外面の一部、体外面に斜めハケ、体内面に横ハケが施された胴張り甕で、形態的にもD１類に類似するが、口唇内面は肥厚せずに、強いナデによって沈線状に施され、ミガキを伴わないものである。器壁も薄く、明茶褐色の色調を呈し、D１類とは外観がまったく異なるものである。

以上の分類に従って各住居址の出土遺物を概観する。

第１号住居址出土遺物（第８・９図―１～44）

第１号住居址からは、須恵器無台坏・壺・灰釉陶器埦・長頸壺、土師器皿Ｂ１類・坏Ｃ・Ｄ・Ｅ２・Ｅ３・Ｆ１類、土師器甕Ｂ・Ｄ１・Ｄ２類、甑、羽釜、鍋などが出土している。

須恵器坏は底部全面回転ヘラケズリが施されたもの（２）と、全面に回転糸切り痕を残すものとがあり、前者は東海地方で製作されたものと思われる。後者は少し緑かかった色調を帯び、ややソフトな感じを受ける。灰釉陶器の埦はいずれも小破片で、６・７の高台内、５の体下部は回転ヘラケズリ調整が施されている。５は体内面上半、６・７は底部内面外周まで施釉されている。

11の内面の放射状暗文は、他の土器の内面に見られる様な花弁状・松葉状の連続性を持たずに、１本１本が独立したものである。18の高台は削出しによるもので、やや黒味がかかった茶褐色を呈する。

19・20の高台は付け高台で、20は床面直上から出土している。

31・34の甕は、かまど内・床面直上から出土したもので、31はやや特異な雰囲気を有する。37はロクロ整形で内外面にノタ目を顕著に残し、黄褐色の色調を呈する。42のハケ目は粗く、全体的に雑な感じを受ける。44の鍋は濃い茶褐色の色調を呈し、駿東地域のものと雰囲気が似ている。

２の須恵器坏と第７号住居址から出土した須恵器坏の破片および本住居址出土の須恵器長頸壺の破片と第７号住居址 151とが接合した。

本住居址出土土器には、２・３に象徴されるごとく時間的前後関係のある２つの土器群が認められる。それは、２・４・９～12・19・20・31・40・41を中心とした土器群と、３・５～７・13～17・22～24・32～35・37・42を中心とした土器群で、前者が時間的により遡るものと思われる。

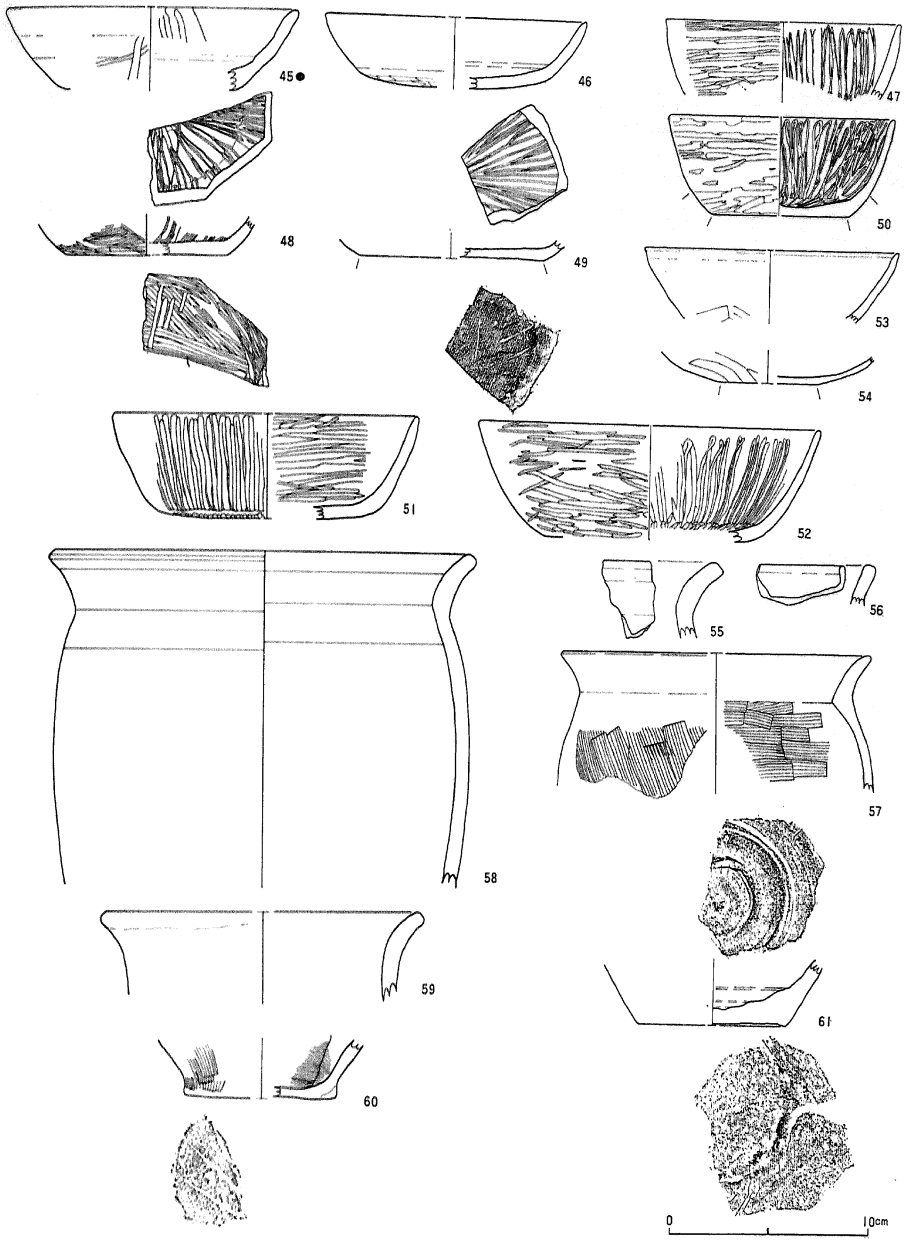
第３号住居址出土遺物（第10図―45～61）

本住居址からは、須恵器坏、土師器皿Ｂ１類、坏Ｂ・Ｄ・Ｅ２類、甕などが出土した。

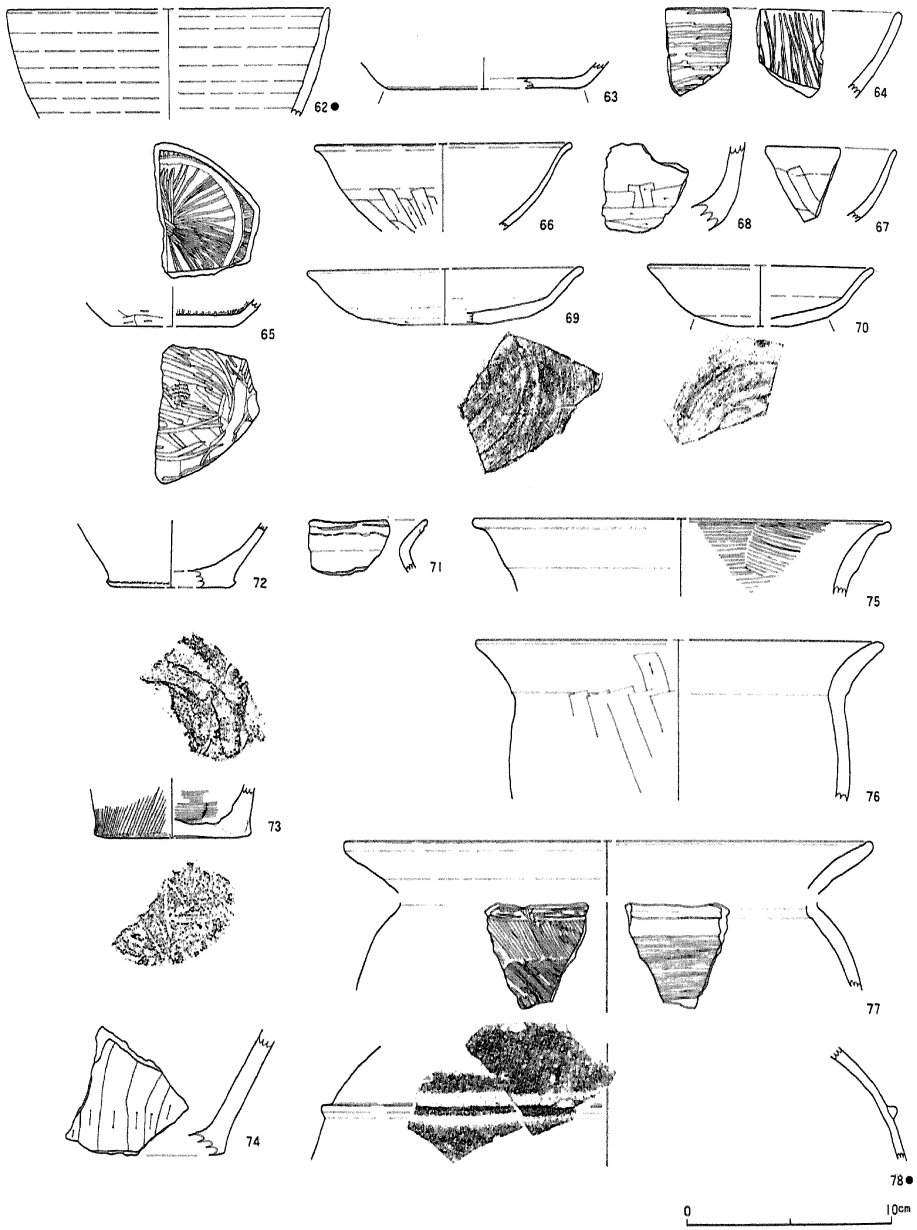
45は灰色でやや軟質である。53の口縁部は外反せずに胎土も他のＥ２類とやや異なっている。55は甕Ａ類と思われ、56も同様に紫褐色を呈する。57は焼成・つくりが良好で、口縁部の形態がＢ類と異なっており、１点のみであったがＣ類と区別した。59は胎土が粗く、表面が風化しているため明確ではないが、横ナデかハケによって調整されているものと思われる。61は外面をヘラケズリした後に、ナデあるいはミガキによって調整されており、非ロクロ整形と思われるが、底部内面にはロクロ整形時に生ずるコテ状工具痕の様な同心円状の沈線文が数条巡らされている。55～58はかまど内から出土したものである。

本住居址出土土器は、８世紀前葉に位置付けられると思われるが、53・54・60は９世紀中頃まで下るものと思われる。

209は鉄斧で、住居址覆土より出土したものである。



第10図　第３号住居址出土遺物



第11図　第５号住居址出土遺物